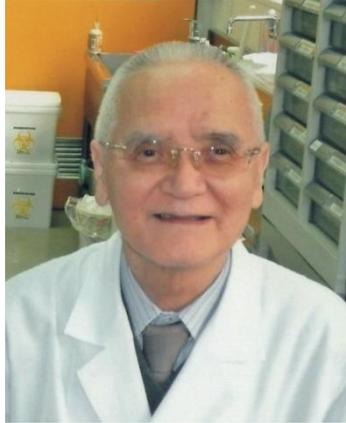


故渡辺昌祐先生のご逝去を悼む  
佐藤光源（名誉会員、東北大学名誉教授）



本学会名誉会員の渡辺昌祐先生が、平成 30 年 10 月 18 日に逝去されました。8 月まで普段通り診療されていましたが体調を崩され、奥様の手厚い介護のもと、心不全で安らかに永眠されました。享年 88 才でした。謹んで哀悼の意を表しますとともに、生前の先生を偲びたいと思います。

先生は川崎医科大学精神科学教室の第 2 代教授として医学教育に尽力され、多数の精神科医を育て、研究や診療に幅広く活躍されましたが、ここでは精神神経薬理学関連の研究活動を中心に振り返りたいと思います。

先生は 1931 年に岡山市で生まれ、岡山大学附属小・中学校、第一岡山中学校（現、朝日高等学校）を卒業して岡山大学医学部に進まれ、1955 年に卒業されました。医学実地修練ののち 1956 年 4 月に岡山大学医学部神経精神医学教室に入局しましたが、奇しくもその翌月に奥村二吉先生が同教室第 4 代教授に着任されました。その奥村先生には入局以来、奥村先生が川崎医科大学を退任されるまで一貫して師事されました。奥村先生は 1970 年に岡山大学を定年退官し川崎医科大学精神科学教室の初代教授に就任されましたが、やがて渡辺先生も岡山大学を退職して奥村教授の教室の助教授に着任しました。そして、1975 年に奥村先生が退任すると第 2 代教授に就任し、1997 年の定年退任まで教室を主宰されました。退任後は同大学名誉教授になり、2002 年まで川崎医療福祉大学医療保健福祉学部臨床心理学の教授を務めたあと、財) 河田病院で診療を続けていました。

渡辺先生は岡山大学に入局した後、奥村先生の指導で脳のアミノ酸代謝の研究に従事し、Geiger らの脳灌流法に C<sup>11</sup>-グルコースを応用する研究方法に取り組んでいた神経化学研究グループに加わって動物実験をされていました。1962 年から 3 年間米国イリノイ大学神経精神医学研究所に留学され、1965 年に帰国後「灌流ネコ脳髓の代謝－灌流法による脳アミノ酸代謝の研究」(精神誌、63: 1145-1157, 1961) をまとめて医学博士を取得されました。当時、アメリカ留学中の体験を教室の若手医師にエピソードを交えて話しながら、熱心に海

外留学を勧められていた姿が印象に残っています。

先生が精神薬物療法に興味をもって基礎的、臨床的な研究を始めたのは、岡山大学講師になった 1970 年頃で、「最も関心を抱いた疾患は躁うつ病で、脳の生物化学的研究の知識が利用できるのではないかという期待があった」と記されています。Cade JFJ (1949) が報告した無機イオンであるリチウム (Li) の抗躁作用に着目し、躁うつ病の本態を解明する新たな手段を得たと Li に魅せられたと伺っています。その後 Li 研究は、「炭酸リチウムによる躁うつ病治療」(精神経誌, 299-311, 1973) で本格化し、1980 年には一連の研究成果を踏まえながら Li の薬理的な作用機序を展望されました(大月三郎教授開講 20 周年記念学術講演集, 1990)。Li の ACh, GABA, 細胞内情報伝達系, 日内リズム, 電解質に及ぼす作用などを取り上げ、Li の抗躁作用の機序はなお不明としながらも、双極性障害の病態解明に強い期待を寄せていました。Li 関連の 70 編余りの研究報告のうち筆頭著者の論文は 1970 年から 1975 年に集中しており、1983 年には一連の研究成果を「リチウム—基礎と臨床」(医歯薬出版, 1983) にまとめて出版されました。その後も Li の抗うつ作用、双極性障害の予防効果、副作用と血中 Li 濃度の関連など多数の研究報告があり、Li 療法の第一人者とされています。さらに clozapine、TCA、SSRI などの臨床薬理学的研究や Li とカルバマゼピンの抗うつ効果の比較試験、抗てんかん薬の血中濃度などに研究が広がっています。

このように先生は、気分障害を主とする精神障害の薬物療法について、臨床から基礎まで広範囲にわたって研究を続けられ、本学会の前身の精神薬理研究会のころから本学会の設立に寄与し、1994 年には大会長として第 24 回日本神経精神薬理学会(岡山)を開催されるなど、本学会の発展に貢献されました。さらに、臨床医家や一般市民に向けてうつ病や不安障害とその治療を平易に解説した著書を多く上梓されており、適正な知識の普及啓発にも寄与されました。

温厚かつ明朗快活であった先生を偲びながら、心からご冥福をお祈りします。